談話室

『論語と算盤』『近江商人の系譜』そしてSDGs

今年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」がおもしろい。主人公は、日本資本主義の父と言われている渋沢栄一。現在に生きる私は、朝起きてから夜寝るまで、彼が設立に携わった会社・組織の製品・サービスにお世話にならない日は一日たりともない。例えば、日経新聞、JR、東京証券取引所、みずほ銀行、王子製紙、帝国ホテル、聖路加国際病院、明治神宮・・・・・。数えきれないくらい多くの会社(約500)の設立や社会公共事業(約600)に関わり、近代日本の設計者の一人と呼ばれノーベル平和賞の候補にもなっている。2024年新しい一万円札の顔になれば、電子化が進展し紙幣の流通量が減るとはいえさらに頻繁にお目にかかることになる。

この渋沢の著書が『論語と算盤』。考えてみると論語とソロバンとは似ても似つかぬものであり、一方は人としてどう生きるか、もう一方は利益を得て金持ちになるにはどうするか、を象徴するものだ。このかけ離れた二つの概念を同時に実現するにはどうすればよいか、を説いたのが『論語と算盤』であり、渋沢の作った会社が他の財閥系会社とは一線を画していることからもそれを実践したことがうなずける。

渋沢の主張を単純化していうと、目指すべきは株主価値よりも社会価値の追求を重視する資本主義であり、合本主義とも言われている。当時から、株主価値の最大化を追求する資本主義には重大な欠陥があることを見抜いていたわけで、その慧眼(けいがん)に驚かされる。世界金融危機の後、渋沢の思想が日本のみならず海外でも注目を浴びた理由は明確である。

こうしたことをつらつら考えていて思い出したのが、近江商人の「三方よし」、多くの人が知る「売り手よし・買い手よし・世間よし」である。『近江商人の系譜』は、私が社会人になって間もないころ職場の先輩から薦められた本で、商売の心得が近江商人の理念として書かれており、協同組合の理念にも近いと感じた記憶がある。

「三方よし」の理念は、今の言葉でいうと「win-win」の関係を築いたうえでCSR(社会貢献)をしっかりすることを説いている。最近ではCSRというよりCSV

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

(共通価値の創造)と言ったほうがフィットするかもしれない。社会的な課題解決と企業利益の追求を両立する考え方であり、先ほど紹介した渋沢の思想にも通ずるものだ。

このCSVの概念を広く深くし発展させたものがSDGs(Sustainable Development Goals)だ。この単語、特に「サステナブル」とともに耳にしない日はないと言ってよいほど広まっているが、その内容を正確に理解している人は案外少ない。SDGsは、15年国連が採択した「持続可能な開発目標」であり、30年までに達成すべき社会課題を、17のゴールと169のターゲットに分け解決の目標とするもので、17年にはその進捗を測る244の指標も作られている。

SDGsが広まり始めたころ、日本にはすでに「三方よし」の考え方があり昔から取り組んできたことで目新しいものではない、といった反応があった。先ほども触れたとおり「三方よし」はSDGsの一部とも言えるが、決定的な違いがある。それは「時間軸」という第４の軸が明確に加わっている点だ。SDGsが実現できるかどうかは、この軸をどう意識するかにかかっているとも言える。

時間軸を意識すると、おのずと目標や経営計画の作り方も変わってくる。現状からスタートする従来の計画作りでは2030年ましてや2050年といった先の姿は描き切れない。存在意義やあるべき姿・実現したいこと(パーパスあるいはヴィジョン)をしっかりと位置付けたうえで、それに向けて誰が何をどうするか、を議論しなければならない。フォア・キャストからバック・キャストへの転換だ。経営者には、未来への強い責任感と困難に立ち向かう覚悟が不可欠だ。

それともう一点。「世間よし」の世間の範囲が格段に広がっていること。今や待ったなしの課題である気候変動や生物多様性の議論を進めると、最終的には我々人類が住む「地球の命」につながる。まさに世間は広いことも念頭に置かなければならない。

国・行政機関・企業・団体など様々な組織が、「サステナブル」を標榜し達成すべき目標や将来のあるべき姿をうたい始めた。言葉にまどわされることなく「今だけ、金だけ、自分だけ」になってはいまいか、今一度よく考えてみる必要がある。

((株)農林中金総合研究所 取締役会長　大竹和彦・おおたけ かずひこ)

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/